



さをり織り

今年に入ってから放課後デイサービスでは、さをり織りを始めました。12月下旬に『NPO法人ワークーズかすがい』さんより織機を頂き、倉庫の一部を改装し、工房にしました。

最初は「これは何？」と初めて見る織機を不思議そうに見る子も居ましたが、実際に触れて体験してみると、どんどん表情が変わっていき、とてもいい顔で楽しそうに織っています。

手と足を一緒に使わないといけないので、難しい部分もありますが、スタッフと協力して織ることが出来ています。

最近では「これでクッションを作りたい！」「何か作ってお家に持って帰りたい！」「誰か欲しいって言う人がいるといいな」と、言ってくれています。

まだまだ始めたばかりなので、この先どうなっていくかは分かりませんが、いつか子どもたちの将来に役立てる日がくればいいと思っています。



ご意見ありがとうございました

2月9日には11名の参加を頂き、保護者との懇談会を開きました。冷たい雨の中、出席頂きましてありがとうございました。寄せられたご意見は検討して、アンケート結果と共に会報等でご報告申し上げます。

デイサービス通信

双六遊び



1月15日に市役所の高年福祉課の職員6人の方々がデイサービスの見学に来られました。29年4月より現在の通所事業が新しく「総合事業」に移行されるため、介護予防通所介護サービスの運営状況を把握する目的で見学されました。

その日の利用者さんは欠席もあって5人だけでした。職員の方々をお誘いして利用者さんとペアを組み『双六ゲーム』を行いました。

自前で作った巨大双六にビッグなサイコロを振って、「犬の鳴きまねをする」「机を1周する」「県名を3つ答える」など頭も体も使って、上がれそうで中々上がれないゲームに皆さん白熱していました。最後にペアとなった職員さんと一緒に記念撮影したりおやつを頂いたり利用者さんも大満足でした。

今後も高齢者が楽しみ、元気になれて心地よい居場所づくりとなるデイサービスにしていきたいと思っています。

2月3日の節分に、利用者さんと一緒に『恵方巻き』作りを行い味わいました。雛人形も作り、春の足音が近くまで来ているようでした。



双六遊び



豆まき



心づれづれ

「ご存知ですか？ソーシャルワーカー」

みなさんこんにちは。一宮市立市民病院の医療ソーシャルワーカー、山口です。今回はみなさんに、僕の仕事のことをお話しさせていただきたいと思っています。

まず、僕の仕事である「医療ソーシャルワーカー」というのは、ざっくり言うと「病院の中にいる福祉関係の相談員」です。病気やケガをすると、医療費のことや介護のことなど、生活上の様々な問題が発生します。そんなときに相談して、一緒に解決方法を考えてくれるのが医療ソーシャルワーカーです。市民病院の1階の医療福祉相談室という部屋で、医療ソーシャルワーカー7名体制で相談を受けています。病院というと、昔は病気の治療をするだけのところでしたが、今は患者さんの生活の相談もするようになってきているんですね。

その医療ソーシャルワーカーは医療福祉相談室だけでなく、2階にある「がん相談支援センター」にもいます。ここは、「がん患者さんやそのご家族のための、なんでも相談所」みたいなところです。例えば、「主治医から聞いた病状説明がイマイチ理解できへんわあ」とか「医療用麻薬って心配やわ…」とか「病気が心配で夜あまり寝られへんわあ…」など、がんに関わる心配ごとに対して、専門の職員が相談してくれます。必要があれば、薬剤師やカウンセラーなどの専門職にバトンタッチして相談をしてくれます。他にも、「乳がんや婦人科がんの患者サロン会」や「がん患者さんの就労支援の相談会」の運営もしています。

まあこんな感じで、いろいろ相談できる「医療ソーシャルワーカー」という生き物が病院にはおりますので、なにかありましたら気軽に相談してくださいね。

一宮市民病院 医療ソーシャルワーカー
山口 和宏

ヘルパーだより

NO. 44

今回は介護における、「自立支援」について考えてみたいと思います。

ヘルパーが関わる支援で「これは自立支援と言えるのか…？」と思いつけるケア内容に時々考えさせられることが多々あります。例えば家事援助の中身に「食事作り」が含まれていますが、それは誰に対しても行える行為ではありません。支援する利用者の置かれている状況を加味し、必要である場合のみ行為として成り立ちます。介護保険ではケアマネジャーが、障害福祉サービスでは相談支援事業者が利用者の介護計画を作成し、それに沿って事業所が支援を行います。

介護において「できることは自分で行う」ことが望ましいことは言うまでもありません。さらに「できるようにになりたい」「やっていきたい」と思えるような意欲を利用者から引き出していくことも大切な支援の視点です。

過剰介護は身体機能のみならず、生きる意欲そのものが低下してしまう危険性があります。利用する方も関わる方も、そのことに気付かないで安易な介護を受けることにより、身体能力までも衰えてしまいかねません。過剰介護、残存機能の活動…どちらかの一方的な発想に基づく対応は「自立支援」とはほど遠いものです。

介護サービスは、利用者の心が少しでも元気になるよう、暮らしやすく生活環境を整えたうえで、さり気なく見守っていく姿勢が大切です。

選べる、できる、楽しい、快適だ、美味しい…「自立支援」を考えるとプラスの言葉が出てきます。このような本質がプラスの方向、生き方を指すものでありたいと思います。

